



絵本で 子どもが 育つこと

～ AI社会を生きる力 ～

sn0w--t

まえがき

「子どもに絵本を読んであげると良い」という話を耳にした方は多いと思います。しかし、それがなぜなのか、どんな効果があるからなのか、どのように読めばいいかなど、具体的な答えに出会う機会は少ないように感じます。

私は現在、図書館などで読み聞かせボランティアをしています。

絵本を子どもに読むことが生む効果への期待が、子どもと一緒に来た大人たちの様子から、この数年で一段と高まったことを肌で感じています。しかし、お話を伺ってみると、絵本への疑問や悩みなどは、(同じように読み聞かせに通っていた)十数年前に私が持った疑問と同じです。

そんなことを思いつつ、子ども達とのふれあいや仲間との語り、様々な本などとの出会いの中から得た、私なりの答えを形にしたのが、この本です。絵本が、特に言葉を獲得するまでの子どもにとって、どんなに素晴らしいものかを伝えたいと考え、筆をとりました。細いながらも、一本の筋道を通った話にしているつもりです。

しかし、なにぶん、専門家ではありません。絵本や物語の世界に関心を持ったのも、諸先輩から比べたら、最近のことです。なので、至らない部分も多いかと思います。その際は、コメントいただけるとありがたいです。

これからを生きる子どもが身につけるべき能力

人間は「白紙」の状態生まれ、「子ども」でいる間に、その時代に必要とされる能力を身につけ、やがて大人として独り立ちします。

現代に生を受けた子どもが確実に獲得すべき能力、その一つは読解力である、という考えに私は共感します。

読解力とは、文が読めて、書いてある内容やその意味が、筋道を立てて解ることです。

子どもの読解力を上げる必要がある

現状への危機感を、全く違う分野で活躍するお二人の文献や記事から、私は知りました。その人とは、東大入試を突破できる AI(Artificial intelligence:人工知能)「東ロボくん」の研究開発で中心的役割を担った新井紀子教授と、翻訳家・児童文学者であり子どもにいい本を手渡す大人を支援する活動を続ける脇明子教授です。

社会のこれから

これから生まれる子ども達が大人になる頃、AIは人間よりも「知的」になっているのだそうです。

そんな未来、個人に起こる大きな変化として、今ある職業のうち何割かがなくなる、という予測があります。AIが得意とする分野の仕事を、人間はする必要がなくなるのです。

18世紀末からの産業革命によって、機械が人間の単純労働をうばったように、今後、AIが人間の頭脳労働をうばう可能性は十分にあります。現に、金融・司法・医療分野におけるAIの研究・開発は非常に活発です。

子ども達は、そんな将来に備える必要がある、と私は考えます。

もし未来が、人間は仕事をしなくていい時代になったとしても、自ら選んでそうしたのか、それとも能力的にせざるを得なかったのかでは、大きな違いがあると思うからです。

それでは、どんな能力を備えておくべきなのでしょう？

これこそが、新井教授のいう「読解力」である、と私は思います。

実は、現在開発中のAIの多くは、莫大な量のデータを統計的に処理することで一番多かった回答を見つけ出し、もっともらしく答えているだけです。文脈の意味を深く理解し、論理的に解くことはなく、考えているようで考えていません。また、意思を持たないため、与えられた目的に沿った答えを探し出すことしかできません。

ですから、仕事をする上で生じた問題点を整理した上で、AIに「何を調べるか」というスタートを設定することや、得られた回答の判断材料となった資料をチェックして、AIが「正解を導き出せたか」というゴールの判定をすることは、人間に残されるはずの仕事です。これを行うために必要となるのが読解力です。

社会のいま

時計の針を無理に進めなくても、現代社会でも、考えて判断すべきことは色々あります。

日常生活ですら、家の中には科学技術を利用した製品であふれており、使いこなすにはそれなりの知識が必要です。また、健康な生活を送るためには、食品や運動、医療などの情報が理解でなくてはなりません。

政治的・社会的な問題に対しても、一般市民がそれぞれの立場で意見を持たなくてはなりません。うわさ話や偏った意見、フェイクニュースなどに流されては、民主主義が成り立たなくなる可能性もあるのです。

今の世の中を生きていくにも、読解力は必要です。

なぜ本は子どもの成長に必要となったのか

本のことに話を戻しましょう。

なぜ、本の読み聞かせが、これほどまでに定着しつつあるのでしょうか。

それは、子どもが大人になるために、特別な働きかけをする必要ができたからだと思います。現代は、子どもの社会と大人の社会が分断しすぎており、普通に暮らしているだけでは、子どもは自分が成長した時の「姿」を想像できません。そのため、何らかの手段を使って、子どもに今後を「どう生きるべきか」を示す必要があるのです。

仕事を例にしてみましょう。昔であれば、親がする仕事は、子どもの生活の場から見えています。そして、大人になった時に必要となる能力も、日々の手伝いをする中で身につきます。

しかし今では、たとえ家が仕事場であっても、家庭内のやりとりだけで仕事は完結しません。また、仕事をするための能力も、親が持つものとは違ったり、それより高い次元のものを備えなければならない場合もあります。

このように現代社会では、子どもは生活から、また親の生き方から、自分が「どう生きるべきか」を見渡せません。世の中をどのようにとらえ、自分の価値感をどこにおき、何のために生きるかといった「文化」そのものの受け渡しが、親子の間でできなくなっているのです。

そこで登場するツールが、子どものために書かれた本です。

子どもの本には、童話作家さんが自分の童心と一緒に探し出した、子ども達が気になる・知りたいと思っていることが、研ぎ澄まされた感性によってエッセンスとして抽出され、子ども達が理解できる最小限の絵と言葉で描かれています。

大人は、子どもの本が伝える物事に、子どもと一緒に心をよせることで、「文化」を伝えることができるのです。

子どもが生き抜く力を育てるために

それでは、本を使って子どもに文化を伝えるためには、どうしたら良いのでしょうか。

そのためには、本の世界と現実の世界の両方で、子どもの感情が動く必要があると思います。

本を読んでもらった時、子ども達は、大人が芸術作品を鑑賞する時のようなやり方、つまり、絵の美しさや言葉の響きの面白さといった、本が紡ぎだす五感そのもので心が動いているのではない、と私は考えています。

そうではなくて、子ども達は、絵本が生み出すものから刺激を受けることで、自分が生活の中で体験した記憶の断片が映ったフィルムを探し出し、その時の気持ちを思い出しながら編集し、自分だけの映像を心の中にある映写機で再生しながら「感動」しているのだと思っています。

これこそが、新井教授のいう「読解力」の芽です。

子どもが心にとどめる記憶は、大人が素敵だと思う経験とは違います。子どもにとっては、いつもどおりの生活をしていく中で出会うものこそが、子どもの本を心から楽しむために必要な体験なのです。

だから、いつもの生活の中で興味があって、心の中に自分の思いのストックがいっぱいあることが描いてある本は、他の本と比べて楽しめます。また、自分の感情が投射しやすい主人公が活躍する本も、興味を持ちやすいと思います。

こんな本を選んで子どもに手渡せるのは、いつも子どもの身近にいる大人だと思います。

どんなツールを使ったらいいか

子どもに絵と言葉で語りかけるものなら、絵本でなくても、動画でもいいのでは？と思う方もいらっしゃるでしょう。でも、それは良くない、と私は考えています。

動画で見せることは、どうしていけないのでしょうか。

それは、刺激が強すぎるからです。動く映像と、しゃべる音声。そのすべてを与えると、子どもが心の中で自分の体験を思い返す必要がなくなります。なぜかという、動画は見ているだけでお話が進むからです。また、制作者の心情を感じとってしまい、子どもが自分の感情を再現することを妨げることもあるでしょう。さらに、子どもが内容を理解するスピードとは違う速さで場面が切り替わることもあります。

その点、絵本では、映像は絵として厳選された場面のみ、音声は自分をよく知る人の声です。絵と絵のすき間を、実際に体験した時の気持ちで埋めることで、まるで自分が絵本の中に入ったかのように感じてお話を聞くことができます。そして身近な人の声で語られる文は、登場人物の気持ちを推し量りやすいものです。加えて、ページをゆっくりめくったり、じっくり見たり、戻ったりと、子どもが十分納得できるようにお話を進めることができます。

もっと素朴に、何も無い所からお話をつくる手もあります。それはそれですばらしいものですが、すべての人が実践できるものではないようにも感じます。

そう考えると、絵本は大部分の人におすすめできるツールです。

どのように絵本を読んだら良いか

ここからは、ガイドになります。

絵本を読んでもらう時に、子どもが自分の心の中でも楽しめるようにするためには、どのようにすれば良いのでしょうか。

まず、絵本選びが大切だと思います。子どもが体験したことが描かれているものの方が、子どもは想像力を働かせやすいと思います。また最初のうちは、絵がはっきりとしていて分かりやすく、言葉もシンプルなものの方が、子どもは絵本が何のことをいっているのか分かりやすいと思います。

子どもの日常を知っている大人だからこそ、その子は何が好きで興味があるのかを知っていると思います。そんなことが描かれている絵本を選ぶことが、コツです。

また、子どもの心の動き寄り添いながら、私は読むようにしています。思い出しているようなら、ゆっくりと時間をかけて。おもしろがってページをめくるのを嫌がったら、くり返して何回でも。興味がないようなら、その場で本を閉じて構いません。インタラクティブに読んでいるのだから、教科書通りに前から順に最後まで読む必要はないと思います。それが、ライブの楽しさです。

それから、絵本を読むことに技術は必要ありません。お父さんお母さんなど、子どもがいつも一緒にいたいと願う大人なら、読んであげるといふ行為そのものが、子どもにとって一番うれしいものだからです。

子どものことをよく知っている人が絵本を読んであげることには、大きな利点があります。それは、子どもが絵本の世界に旅立つ時の、心強い味方になれるということです。感情を動かす聞き方をしている時に生じるドキドキ感を、大好きな大人と一緒にいることで、まぎらわすことができます。

その上で気をつけたいこととしては、無理やり言葉にさせないことです。人は、分かってしまったら考えることをしなくなります。子どもの貧弱な言葉で、絵本を読んだ時に生まれたモヤモヤして分からない感情をラベリングしてしまえば、そこから成長することはなくなります。それに、案外、子どもは大人が思っても見ないものに関心をもっています。そこに、大人が期待する答えを当てはめてしまえば、誤解しか生まれません。

そして何よりも、大人も楽しむことだと思います。

絵本を開いたら、大好きな人と一緒にワクワク・ドキドキ・ハラハラできると分かれば、子どもは「よんで！」と、あなたのところへ絵本を持ってくるようになるでしょう。

絵本は人を結ぶもの

以上が、私が絵本の読み聞かせを通して感じていることです。色々、書かせていただきましたが、難しく考える必要はありません。

分からないことがあったら、図書館に足を運んでみてください。そして、人に聞いてください。

子ども用の本の貸出カウンターに座っていることも多いのが、司書さんです。本のこと、それから子どものことを、日々真正面から考えている専門家です。

それから、本のことと子どものが大好きでボランティアをしている、私のような大人も大勢いると思います。

絵本は、結ぶものだと思うのです。

人と文化。人と心。人と人。

絵本を生活の中心において、子どもと一緒に毎日を過ごしてみてください。

人とのつながりがある子どもを育てることが、社会がどんな変化を見せようとも、生き抜く力をもった子どもを育てることになるのだと、私は思います。

この辺で、私の話は結びにさせていただきます。

あとがきにかえて

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

なにぶん私が一人で作った本であるがゆえ、内容の誤りや誤字脱字、勘違いなど多々あるかと思えます。その責任はすべて私にありますので、ご一報いただければ善処いたします。

最後に、この本を書くための「根っこ」となった書籍などについて紹介します。いわゆる、参考文献です。とはいえ、私のつたない文章と比べたら、ここに挙げたものを読んでいただいた方が分かりやすいに決まっています。気になるものは、是非ご覧ください。

【絵本に関するもの】

- 「読む力は生きる力」、脇明子、岩波書店、2005

※ その他、子ども本の読書会で学んだことがベースになっています。

【人に関するもの】

- 「大学生に必要なサイエンス教育とは何か?」、鈴木久男、名古屋高等教育研究（第10号）、2001
- 「転換期を生きるきみたちへ」、内田樹ら、晶文社、2016
- 「アメリカの『忘れられた労働者階級』の葛藤」、J・D・ヴァンス、TED.com、https://www.ted.com/talks/j_d_vance

【AIに関するもの】

- 「AIの性能を上げている場合ではない」、山口恵祐、ITmedia、http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1611/20161111_001.html
- 「人工知能 (AI) の現状と未来」、平成 28 年度版情報通信白書
- 「5分で理解！技術的特異点（シンギュラリティ）とは」、オシママサラ、Tech2GO、<https://blog.codecamp.jp/singularity>

私のブックログ本棚へも、お越しいただけると嬉しいです。

「ことば☆こども☆これから☆こうきしん」、snow—t、<http://booklog.jp/users/snow—t>

本の履歴

1. 初版を公開しました 2017/05/20